戦争責任と働く現場をしなやかに問う人

鈴木文子詩集『電車道』に寄せて

1

私の暮らす柏市に隣接する野田市に鈴木文子さんは生まれ育ち、最近我孫子市に引越すまで暮らし続けていた。野田市は醤油の生産地で有名だが、鈴木さんの詩の中には、父上が醤油の樽職人の名人であることを描いた作品があり、この地に根ざした暮らしを長年してきたことが他の詩作品からも分かる。鈴木文子さんの名前は、『ナホトカ集結地にて』を書いた詩人鳴海英吉さん宅に遊びに行った時に、話の中で「文子が……」と繰り返し出てきて知るようになった。鳴海さんは鈴木文子さんのところによく電話をして話をしていたのだ。実際に鈴木さんとお会いしたのは、二〇〇〇年九月二日の鳴海さんの葬儀の日だった。鳴海さんと鈴木さんは「炎樹」と「詩人会議」の仲間であったし、野田の鈴木さんの自宅で「炎樹」の合評会がよく開かれていて家族的な付き合いをしていたという。鳴海さんは鈴木さんの母上の手料理を褒め称えて母上とも親しかった。鈴木さんはその意味で鳴海さんの生前の詩人としての素顔と日蓮宗不受不施派の優れた研究者であった鳴海さん全体像を知る数少ない詩人である。その後も『鳴海英吉全詩集』を製作する際にも支援してくれ「鳴海英吉研究会」にも毎年参加している重要なメンバーの一人である。鳴海さんのお墓参りにも鳴海さんの好きなお酒をさりげなく添えて、鳴海さんの死を悼み、鳴海さんの詩を墓前で朗読する姿は、本当に鳴海さんを慕っていたことが痛感させられるのだ。お会いして感じたことは、鳴海さん同様に、鈴木さんも全く飾らない人柄で、他者の良き点を率直に感じたとおりに発言する。その際に他者への思いやりが根底にあるので、例え苦言であっても話題になった人物を一緒に心配するような優しい気持ちを抱かされるのだ。鳴海さんは生涯を鉄板工などの職人であったし、鈴木さんは東武鉄道の様々な現場を十代から定年まで四十年以上も勤め上げた。二人とも叩き上げの現場から言葉を発していて言葉にリアリティとエネルギーが満ち溢れているところが共通している。二人とも歯切れのよい江戸っ子の語りを生かした朗読の名手である。たぶん鳴海さんは鈴木さんを我が娘のように思って接して助言をしていたのだろう。また鈴木さんも鳴海さんを父のように感じていたのだろうと思われる。

鈴木文子さんの第一詩集『鈴木文子詩集』は三十五歳の時に一九七七年に刊行されている。三十六篇の詩の中に「風化」という詩篇がある。

風化

まっ黒なみかげ石に
圧縮された白骨の文字が
原爆で芽ぶいた
無残な美を語っている
補強され
叫びの口をふさがれてしまったドーム
二十数万の呻きを
ぬりつぶしたような大通り
私は多くの仲間達と
広島の平和公園を歩いていた

肉体の一部が
ケロイドの細胞が
アルコールびんにつかっていた
魂をはぎとられた毛根は
ふたを押し上げることもできず
こそこそと
犯罪者のような触覚を
二十五年間さらけだしてきた。
夕日が錆びた鉄のように
ポロポロと沈む公園に私はいた。

新しい時間に
踏みつぶされている広島
生き残った者は
貝のように口をふさぎ
着飾った人々が
言葉に化粧して
ぞろぞろ歩いていた広島
私も
確かにその中の一人にちがいないが
身をそぎとられるような痛さが
とがった神経に
腰を下していたのだ

今日も原爆の影をひきつれ
一角に区切られた
あの日の広島の一日が
ふらふらと起ち上がるのを
私は　息苦しく見ている

第一詩集の冒頭から三番目にこの詩「風化」が掲載されている。一九七〇年に二十八歳で初めて広島の原水禁大会に行った経験がこの詩を書くことになったと後書きに記されてあった。若き鈴木さんが広島の苦悩を受け止めようとする姿勢

がとてもいい。その意味では鈴木さんは初めから、自分のために詩を書いているのではない。他者の苦悩や時代の混沌を直視しようとして、困難な課題を引き受けて詩作を開始したのだといえる。風化していく戦争の悲劇を風化させてはならないと抵抗する若き鈴木さんがこの詩の中で生きて言葉を発しているのだ。広島に旅する者でありながら、傍観者を否定してしまい「広島の影」をいつのまにか感受していつしか被爆者が目前に立ち上がってくるのを垣間見ようとしているのだ。その姿勢に苦悩を共感化する鈴木さんの詩的精神の真摯さを私は感じるのだ。リアリストでありながら深い心情の持ち主である存在は、鳴海さんと共通するものを多分に備えている。鈴木さんは十代の後半から東武文学集団、労働者文学会議や私鉄文学集団などに参加し、作品を書き始めているので、詩集を三十五歳で初めて出すのは遅いくらいだが、この広島体験が鈴木さんにとって重たいテーマを真正面から取り組む決定的な契機となったのに違いない。

2

第二詩集『おんなの本』は一九八三年に刊行されて二十六篇が収録されているが、その中で「セイタカアワダチソウ」が鈴木さんの問題意識の高さとその果敢な試みに多くを考えさせられる。

セイタカアワダチソウ

セイタカアワダチソウが咲いている
中国の岸壁で島国の女が死んだ
女が化粧をしていたとき
女にぬくもりがあったとき
肉体をむさぼった男たちのように
むきだしの胴体には
蝿がむらがっている
女の名は従軍慰安婦

——お国のため
お国のための戦争ですから
仕方がなかったんです
んん。　つらいなんて思いませんでした
明日は死ぬかもしれない兵隊さんを
慰さめてあげられるのはわたし
そう思うとうれしくて
母親のような気持で
腰をもちあげてサービスいたしました

ひっそりつつましやかにと育くまれ
服従しひざまずき祈ることが
女らしいとされてきた日本の女
日の丸にかりだされ
第一戦で戦ったのは男たち
からっぽになった国を子供等を守ったのは
戦争を生き抜いた女たちだ
セイタカアワダチソウが
黄色い花をつけている
（「セイタカアワダチソウ」の前半部）

鈴木さんの「おんな」とは女ゆえに最も悲惨な死に方をした女たちへの鎮魂であり、その歴史的な事実に独自な視点で迫っていこうとする。従軍慰安婦とは、主に他国の従軍慰安婦を想定している場合が多いが、実際は日本人の従軍慰安婦も相当数いたことが言われている。日本人の慰安婦の内面に肉薄しようとする視点でこの詩が成立している。

そんな女たちの「むきだしの胴体」は中国の岸壁近くの野原に横たわっていたが、その女たちの肉体が野原のセイタカアワダチソウに化して今も黄色い花を咲かせているのではないか。鈴木さんはたぶんセイタカアワダチソウを見るたびに、父から聞いたであろう中国大陸での悲惨な女たちのことを思い起こしているのだと思われる。

——敵に殺られたんなら仕方ないよ
あたしだって侵略者なんだから
でもさ　くやしいじゃないの
自分の国の兵隊に殺られたのさ
そりゃね
男たちもひどいめにあったけど
兵隊は名誉の戦死で
ひきずりだされた
あたしらはなんだってんだ
なぐさみものはどうだってんだ
せめて骨壷ぐらいはよこせ！
どなってやりたいけど
いまじゃ日本は遠すぎるよ

帰化とはその国の人になること
永住とは
あくまでも外国籍でその国に住むこと
セイタカアワダチソウは帰化植物
侵略地に骨をうずめている従軍慰安婦は
帰化でも永住でもないのたれ死
父が
旅の記念に
三八式歩兵銃の弾を買ってきた
シナ事変で俺もこれを使ったという

兵隊仲間では
慰安婦をピーヤと呼んでいたという
セイタカアワダチソウの黄色い花は
ピーヤのにおいがするという
（「セイタカアワダチソウ」の後半部）

樽職人であった鈴木さんの父は、中国大陸に送られたれた兵士であったが、その体験を娘に伝えていた。「ピーヤ」と名付けられた慰安婦たちがセイタカアワダチソウの黄色い花と類似したにおいがするという。「ピーヤのにおい」とは驚くべき証言だと考えられる。しかし身内の父からの言葉なのでためらいはあったろうが、鈴木さんは父の言葉ではあるが、父たちの戦前の男たちが犯した日本軍の行為を直視するためにこの詩を書いたのだろう。その意味で鈴木さんは戦争責任を風化させてはならないという強い思いがある詩人なのだ。この詩によって鈴木さんは父を通して日本の戦争責任を明らかにしていきたいと考え始めたのではないか。この一九八三年とはバブル景気が始まったころで、アジアなどへの戦争責任などは、片隅におかれて経済力を過信していた情況だった。鳴海さんがシベリヤに抑留された兵士たちの思いや軍都広島の加害者としての側面を入れながら連作を書き継いでいた頃に、鈴木さんも呼応するように日本の戦争責任を身を切る視点で開始をしたのだろう。

3

第三詩集『女にさよなら』は一九九一年刊行されて、二十一篇が収録されている。その中でも「夏を送る夜に――原発ジプシー逝く」という詩がある。この詩には衝撃的な内容が含まれているが、鈴木さんのしなやかな口語の文体によってさらにリアリティを増して、よりいっそうの危機意識を感じさせてくれる。

夏を送る夜に
――原発ジプシー逝く

いいやつだったなあ。
ああ　いいやつだった。
それにしてものんべえだったなあ。
のむしかなかったのよ。

百姓やめて何年んなる。
田畑（せんばた）くさぼうぼうんなって五年よ。
漁に出なくなって三年半。
不漁つづきで　借金かかえて、
どうにもなんなかった。
そんな時、

請負いの親方がきたってわけさ。
十分か二十分働らいて、
たった三分で一日の手間もらったこともある。
命がけで魚とってたもんにとっちゃあ、
原発さまさまだった。
百姓だっておんなじよ。

なんにも知らねで、
ゴムのカッパ着て　長グツはいて、
宇宙人みてなマスクつけて、
マスクは苦しいからはずして仕事した、
いつだったか、
炉の床にこぼれた水ふきとってたら、
胸に下げたアラーム・メーターが、
ビービー鳴ってうるせえのなんの、
そんなの無視して作業やったけんどな。

そらあそうだ。
メーターがパンクしたって
やめられるもんじゃねえ。
上のせ手当ほしかったもんな。
あしたっから仕事もらえなくなったら。
そのことばっかり考えて。

仕事終ると。
一二〇ミリレムって。
被曝基準どおりに書いたもんだ。

二〇〇ミリレムこえると、
メーターの針が切れるそうだ。
放射能は、
見えるわけじゃなし　臭くもなし。
仕事してっとき、
どこかが痛くなることもなし、
恐ろしいなんて信じられねえんだな。
覚えてるかい　あの黒人のこと。
でっかい体で真っ白い歯で。
コニチワ。
日本語はコニチワとサヨナラだけで。
体でリズムとりながらペラペラしゃべって、
人なつこい気のよさそうな青年だった。
両手をいっぱいひろげて、
首をちょこんと曲げて、
サヨナラ。
ひび割れた炉ん中で、
一〇〇〇ミリレムもあびたって話だが、
無事に国へ帰れたろうか――。

若くて肌が光ってたから、
毒なんかしみなかっただろうよ。
きっと　そうしみなかった。

いいやつだったなあ。
ああ。
もうすぐおれたちも。
まぁ　一パイいこうか。
ああ……。

深夜コンビニストアに煌々と点いている蛍光灯の光は、二十四時間発電されている原発から供給される電気と言われている。私たちの暮らしは電気の多くがすでに原発によってまかなわれている現実がある。しかしその原発のメンテナンスに「原発ジプシー」という労働者が存在し、命がけの仕事をこなしている。その現場の実態を鈴木さんは書き記した。このリアティは働くものたちへの鈴木さんの共感と連帯感だろう。そしてそのような職場に行かざるを得ない労働者の悲しみや痛みを鈴木さんは書かざるを得なかったのだ。新聞記事や論文や告発文ではなく、労働者の肉声で鈴木さんは詩作すべきだと考えた。その試みがこの「夏を送る夜に――原発ジプシー逝く」だ。危険を承知で仕事をしなければならない人間が背負っている暗い闇を暗示させている。しかし一緒に仕事をして被曝死した仲間を悼み、他の仲間を心配する「原発ジプシー」の存在は、原子力発電の問題点や現代のエネルギー問題の矛盾を暴いている。鈴木さんは最も過酷で悲劇的な労働者の存在理由や被曝した人間の諦めにも似た悲しみをこの詩篇で書かざるを得なかったのだ。

4

第四詩集『鳳仙花』は二十二篇の内の一章八篇が母や祖母など家族のことを書いた詩篇だ。二章には尾崎放哉の晩年を看取った漁師夫婦を描いた「日暮れに向かって」や天保の飢饉で地域の難民に米や麦を施し粥を炊いて食べさせた醤油醸造家たちを描いた「秋の日に」がある。この二篇などは、鈴木さんが丹念に調べて歴史の中で人間を信じて生きた人物たちの存在を愛情を持って照らし出している。三章の七篇は戦争責任を問い続ける詩群だが、表題作の「鳳仙花」は国境を越えて女同士の共感を描いている。この「鳳仙花」は庭の片隅の鳳仙花を眺めながら、従軍慰安婦となった朝鮮の娘たちの無念さを伝えようと試みていて、胸に沁みる詩篇だ。三章の中で最も印象に残ったものは、次に引用する「見てしまった――旧満州国の旅から」だ。

見てしまった
――旧満州国の旅から

見てしまった
関東軍七三一部隊罪証陳列館を
納められていた細菌線の資料を
部隊長　石井四郎の拡大写真を
庶民をマルタと呼んで運んだレールを
人びとを灰にしたボイラー室
そこから伸びた
二本の太い茶色の煙突を
レールはとおくへと細くなり
うすぼんやりと草むらに消えていた
このレールは眺めるものではない
視界の届かなくなった先端から
立っているこの場所まで
目を貨車にして引きずってくるのだ
レールが吸盤のように
爪先から体温を奪いとっていく

レンガを粉にしたような土は
三千人もの血液を
粉末にした血の色だ
歩行を止めると
ハルピン　平房に沈む夕陽が
レールを横切っているわたしの影を
埋めようとするかのように
のしかかってきた
絹ごしの土が
はらっても　はらっても
ウォーキングシューズに
ねちねちとまとわりついてきた

もう、見たくないよ
誰かの声に現地の若いガイドが
キッ「しっかり見てください！」
長い髪を逆立て目をつり上げて振り返った
次の瞬間
ガイドは仕事の笑顔に戻っていた
部隊が撤退するとき爆破したという
崩れたボイラー室まで
無言で行列した

わたしの観光客よ
見てしまったのだよ
身体の深いところで爆発音がしている

鈴木さんが「見てしまった」ものは、広島・長崎に匹敵す

る日本の戦争責任だった。眼を背けてはいけない、どんなに爆破しても爆発しきれないないものだった。鈴木さんは父の代わりにその場所に行き、父の時代の戦争責任を背負い続けることの意味をこの詩篇で明らかにしようとした。他国の民衆をひどく傷つけたた行為は、永遠にモニュメントとなって保存されている。その中国民衆の怒りと悲しみを一人の日本人として人間として受け止めなければならないとこの詩で告げているのだ。私たちが広島・長崎の悲劇を他国の人びとに見てもらいたいと同様に、中国の人びとも細菌兵器のモルモットになった三〇〇〇人のことを永遠に忘れてならないと考えているのだ。鈴木さんが現地に行きそのことを詩に記したことは、新詩集の大きなテーマとなって想起・反復されていくのだ。

5

第五詩集『夢』は二〇〇五年に出された父への追悼詩集だ。父への感謝をこめた八篇だった。九十歳になった父とイラクで人質になった三人の解放とイラクへ自衛隊派遣に反対する署名活動などを地元の町門で行った詩「署名やるべぇ」がとてもいい。父はその五ヶ月後に亡くなったという。鈴木さんはさりげなく父と共に生き抜いてきて、父から多くのことを学んだことを感謝をこめてこの詩集にまとめている。

新詩集『電車道』は一〇〇篇以上から絞り込んだ四十一篇からなっている。第一章「再訪」はかつての中国戦線を父と訪ねたことを中心にした十六篇だ。父と中国を「再訪」したことや、戦争中不在だった家族とどんな思いで戦時中を生きたのか、子供心を通して書き記したものだ。また近所の戦争未亡人の夫を待ち続ける切ない思いや、二〇〇八年に起きたイージス艦「あたご」と衝突した「清徳丸」の悲劇を描いた「浦じまい」などは、いかに鈴木さんが他者のために詩作しているかが分かる。多分この一章の詩群を突き詰めることによって誰も書けなかった戦争責任を担った詩篇に鈴木さんはすでに向かっているように思われる。第二章「十三夜」の一五篇の中心テーマは、若くして亡くなったご主人と対話しながら生きてこられた鈴木さんの深い内面が、淡々と自然に吐露されている。父、母、姉妹の詩篇も味わい深い。第三章「電車道」は東武鉄道で四十二年勤めた労働者としての誇りを記した詩「電車道」が光を放っている。働く者の喜びがしなやかに表現されていて鳴海さんが生きていたら「文子、よく頑張ったな」と言ったに違いない。また今の劣悪な労働現場に働くものたちに共感し励まそうとする鈴木さんの誠実さは、多くの詩人たちに多くの示唆を与えると思われる。最後に詩「電車道」を引用して小論を終えたい。戦争責任を考え続ける方々や多くの働く現場で苦悩しながら頑張っている若者たちにも、ぜひ読んでもらいたい。

電車道

電車職場で働くあなただから
一直線のレールを描くべきだ
なまめかしい鉄のカーブを
疾(と)うの昔　逝ってしまった詩人の言葉が
記憶の底から溶け出し　まとわりついている

電車の最前列で外を見ていると
雨上がりの朝はレールがまぶしく
コンクリートの枕木も
バラスと呼ばれる砕石も
鉄路に働く男たちの汗と同じに光っている

ブザーよし。出発進行。発車。
運転席から声が漏れ
一〇両連結の車両がすべりだした
景色を飛ばし
もがり笛をひびかせ
蒼い空を映した直線レールは
わたしの体内をいっきに突き抜ける
前方にS字カーブが見える
あれは川面を泳ぐ一匹のへびだ

レールは背骨
コンクリート枕木は肋骨
無数の砕石は　ひんやりしたウロコ
くねくねとした骨格で線路は生きている
そう思った瞬間
車両が蛇行しながらすれ違って行った
鉄路を設計した男たちは
横たわる若い女の腰をイメージしながら
製図にカーブを描いたのだろうか
レールを敷いた男たちも
鉄との闘いだからこそ
胸の膨らみを労わるように
優しくボルトを締めたに違いない

疾(と)うの昔に逝ってしまった詩人の言葉は
間接的な愛の告白だったのだと
本卦還(ほんけがえ)りの今ごろになって理解した
夜の電車道に立ち
せめて女らしく両手で大きな輪を作り
星空にサインを送ろう

鈴木さんのレールは、しなやかに私たちの暮らす場所を走り抜けていく。そしていつしか中国・満州で見たレールとも

重なり私たちを懐かしくもあるが、自らの歴史を厳しく問われる場所へとも連れて行く。人間がいる限りレールが希望となって和解の場所へ近づいて行くことを物語っているのだろう。